



「日輪」 第35号(2月号)

宇宙空間に長い時間集まった水素の融合によって何十億年も光り輝く太陽のように、心の糧を蓄積しよう。

クライストは絵を見ていて、この戯曲を思いついた。

壊れたかめを中心に、何人かの人物が描かれた絵である。

本作品の概要を紹介するので、クライストがどのような絵を見たのか、想像してみてください。

壊れたかめを持って、マルテが法廷に訴える。

被告人は、ループレフトという若い男である。ループレフトは、マルテの娘エーフェの婚約者である。

ところが、訴えられたループレフトも、なにやらひどく怒っている。だれに対して怒っているかという、婚約者のエーフェに対してである。エーフェの不実をののしり、婚約を破棄したいと言っているのである。

法廷内は、マルテがループレフトをののしり、ループレフトがエーフェをののしり、エーフェはループレフトに弁明し、愛をつなぎとめようとしていて、大変な騒ぎである。

そこへ、裁判官のアーダムが登場する。裁判官といっても、こ

の村の村長である。この戯曲の舞台、十七世紀のオランダでは、村長が裁判官を兼ねていたのである。

このアーダムが、見るからに異様な外見で、法廷に入ってきた。頭に傷があり、左足に包帯を巻き、おまけにかつらをかぶっていないのである。かつらをかぶっていないのが、異様なのかというのは、時代状況に関する知識がないとわかりにくいかもしれない。バッハの絵など、昔のヨーロッパの男性が、白くてくるくるした髪型をしているのを見たことがないだろうか。実は、あれは、かつらなのである。あれは、おしゃれというよりも、正装だったので。法廷の裁判官が、かつらをかぶらないで審理を行うなどということは、あり得なかったのである。

では、なぜアーダムは、かつらをかぶっていないのか。当然、周囲の人々、たとえば、書記のリヒトは、そう尋ねる。たまたま、この裁判の日、この村に、ヴァルターという司法顧問官が視察にきていた。各地の行政や司法に問題がないか巡回し、今日はアーダム村長を視察することになっていたのである。当然、ヴァルターもアーダムに理由を尋ねた。

アーダムは、猫がかつらの中に子を産んだから、今日は使い物にならないと答える。

ヴァルターは、予備はないのかと尋ねる。

アーダムは、修理に出していると答える。

ヴァルターは、では、なぜそんなにけがをしたのだと尋ねる。

アーダムは、起きたときに、ベッドから落ちて、

暖炉にぶつかったと答える。

とにかく、裁判は始まる。

ループレフトは言う。昨夜、エーフェの部屋に行ったら、だれかほかの男と話をしていた。頭にきたので、部屋に押し入ると、男は下に飛び降りた。棒切れで、そいつの頭を思いっきりぶん殴ってやった。かめが壊れたのは、男が逃げるときに倒したからだ。

マルテは言う。じゃあ、娘のところに行ったというその男を連れてきなさい。

ループレフトにはそれができない。

また、エーフェも、ある事情のため、部屋にだれかいたのかいなかったのか、言うことができない。

アーダムが、判決を下そうとするとき、ループレフトの叔母のブリギッテが、証拠を持って法廷に現れる。

(国語科 藤生揚亮)

